

## ルネサンスから近代 (フォシャール以前)の歯科医学史

ルネサンスは、ヨーロッパに自然科学の発達をもたらした。歯科医学も他の学問と同様、自然科学の発達により新しい知見がもたらされた。この時代は歯科の基礎医学がはじまった時期である。さらに歯科解剖学の専門書もみられるようになった。

### 1 口腔解剖学、歯牙解剖学の発達

ガレノス(1章参照)は下顎骨が2つあることを主張したが、ヴェサリウス(5, 6章参照)は下顎が1個の骨であることを観察した。ヴェサリウスは、『人体の構造に関する7つの章』の中で、くわしい歯牙と歯列のデッサン図および歯牙の縦断像を描いている。ヴェサリウスの歯に対する認識は、歯と骨を分けたこと、歯髓腔が歯に対する栄養を供給すること、智歯萌出困難については歯肉を切開することをあげている。しかし「歯は一生涯萌出しつづける」、「永久歯は乳歯の歯根から発生する」など、今日とは異なる見解もみられる。

ヴェサリウスの後任として、パドヴァ大学の教授に就任したコロンボは、歯の下の薄膜(今日の歯根膜)に言及している。さらにコロンボの後任ファロッピオは、下顎骨は、5歳までは2つの骨により軟骨膜で結合されているが、7歳以上では分離していないことを観察した。また歯の発生についても、歯胚がしだいに硬化することを記述している。三叉神経、聴神経、舌咽神経、鼓索神経、三半規管などの正確な記述もファロッピオの業績である。

イタリア人医師エウスタキオは、1563年、『歯についての小冊子』を出版した。独立した歯の解剖学書としては最初期のものである。歯と骨を明確に区別し、歯の正確な固定の記述(顎の中に歯肉だけではなく強力な靭帯で結合)、命名はされていないがエナメル質と象牙質の区別を行っている。また歯の発生上、歯小囊とエナメル質と象牙質の合体の発見、歯牙の先端から歯が発生すること、乳歯の歯根から永久歯は発生しないことを言及している。エウスタキオの図譜は、死後100年以上経った1714年、『解剖図譜集』として出版された。歯牙について明確な図が描写されており、ヴェサリウスにはなかった歯頸線も明確に描写されている。

ファロッピオの後任ファブリキウスは、解剖に対する知見は少ない。しかし『外科学大全』(1570)では、口腔治療について、開口障害、口腔清掃と歯石除去、う蝕除去、転位歯の抜歯、抜歯、鋭縁をもった歯の削除、義歯にいたるまで言及している。

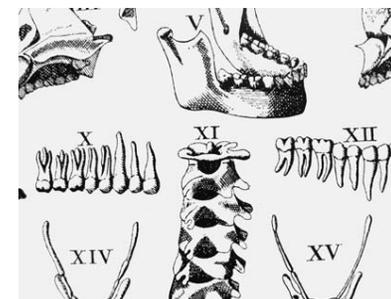
この時代、アメリカ大陸の発見によりもたらされた梅毒が爆発的に流行し、硬口蓋を穿孔し鼻腔に達するほどのひどい症状がみられた。ファブリキウスは、

#### パドヴァ大学

パドヴァ大学は、解剖学でさまざまな業績を繰出した。パドヴァはイタリアにあり、「すべての人にパドヴァの自由を」と封印に刻まれるほど自由に對し思い入れが強かった。1222年、ボローニャ大学で学問の自由に対する争いがあり、自由を標榜する教師や学生をパドヴァの大僧正や町長が受け入れたことによりはじまったといわれる。このような自由な雰囲気も、近代科学の発達に大きく貢献した。



●『ファブリカ』の挿絵 ●ヴェサリウス作  
(医の博物館蔵)



●解剖図譜集 ●エウスタキオ作  
(医の博物館蔵)

この穿孔に対し、しばしば口蓋を閉塞させる口蓋栓子の必要が叫ばれたことについて言及している。この時代の解剖学者は、ときに外科医を兼任していた。

### 2 パレと口腔外科の発達

パレは床屋外科医の出身であったため、歯科についても習熟していたようである。『パレ全集』によると、「よく咀嚼した肉は消化したものと同じ」と消化のメカニズムの1つを記し、歯は外部の感覚はなく内部にある膜で感覚をつかさどるという正しい見解を記し、ファロッピオの下顎骨の見解をもとに、下顎骨骨折の原因を述べたことは、基礎理論を臨床につなげたことで評価される。歯痛についてパレはケルススを引用し、「歯痛はすべての苦痛のうちで、死とならんで最も恐ろしいものである」と記し、歯痛の治療に酸焼灼法を推奨している。その他、口腔の治療について、動揺歯の安静、脱臼歯の整復固定、金の針金で結紮固定する下顎骨折の治療術、歯石除去、口腔清掃、金線銀線によるブリッ

#### パレ

Ambroise Paré  
(1510~1590)